

九州農政局は、平成 30 年 10 月 30～31 日の両日、畑地かんがい用水を活用し優良な経営体を育成するとともに、産地として形成がなされた熊本県菊池台地地区を会場として、研修会を開催しました。

会議には、九州管内の国営畑地かんがい事業地区の営農推進担当者など、約 60 名が参加しました。

一日目の室内研修では、菊池台地用水土地改良区より「菊池台地地区における畑地かんがい営農の取り組みと今後の課題について」、鹿児島県大隅地域振興局より「肝属中部地区における畑かん営農推進の取組」、九州農政局生産部園芸特産課より「加工・業務用野菜をめぐる状況」、散水器具のメーカーから「散水器具の紹介について」情報提供が行われ、その後、各地区営農推進組織の方々との意見交換等を行いました。

また、二日目は、現地研修として、竜門ダムにおいて国交省より施設の説明、その後、(株)春口農園、平川農園において、営農の取組等について説明いただき、意見交換等を行いました。

話題提供、事例報告の概要について紹介します。



室内研修会の様子

事例報告・話題提供

事例報告：菊池台地地区における畑地かんがい営農の取り組みと今後の課題について

菊池台地用水土地改良区 中野 勇一郎 氏



中野 氏

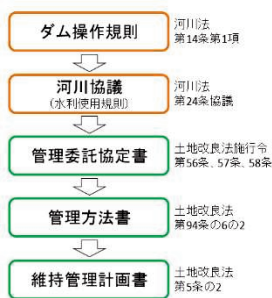
国営菊池台地地区は、竜門ダムを水源とし農業用水の安定的な確保を図り、地域農業の振興を目的として実施され、昭和 54 年度から平成 8 年度まで、17 年の歳月をかけ完成しました。現在、本事業により造成されたパイプラインにより、竜門ダムから末端農地まで送水されており、水田における水源転換や畑地におけるかんがいに有効に活用されています。

受益面積は 4,682ha（水田 1,313ha、畑 3,369ha）です。

また、菊池台地でのかん水は、植木スイカやにんじんなどの多岐にわたる作物に対して、価格が安く、軽量で設置できるチューブかん水が主流となっております。

菊池台地地区では、水利権の目的として「かんがい用水」を基本にダムから末端給水栓までの法的な「しぼり」を組合員へ周知し、その中で水利用方策の適正化を図ることとしています。

今後の課題としては、農家の水利用に対する要望が、野菜の洗浄など様々にあるものの、水利権の範囲内での利用に限られるため、営農に水を使いたくても許可水利権上、水管理上、認められない部分もあることです。

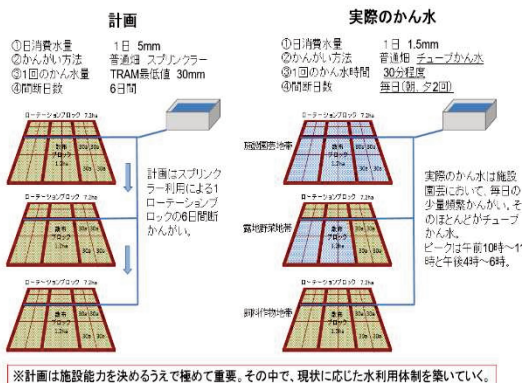


菊池台地の水源は国土交通省管轄の特定多目的ダム

水利権に応じた水利用が可能



かんがい方式(畑)



※計画は施設能力を決めるうえで極めて重要。その中で、現状に応じた水利用体制を築いていく。

事例報告：肝属中部地区における畑地かんがい営農推進の取組

鹿児島県大隅地域振興局 飯山 巧 氏



飯山 氏

肝属中部地区では、「肝属中部地域畑地かんがい営農ビジョン」を策定し、基幹作物のさつまいもと飼料作物のほか、野菜（にんじん・ごぼう・だいこん・ねぎ・ピーマン）などの高収益作物を推進しています。

畑かんのPR活動として、地元説明会での畑かん効果や散水器具導入・開栓手順に関する情報提供のほか、農業祭での展示ブース設置や広報誌による畑かん営農に対する理解促進活動を行っています。

また、受益農家等に畑かんの良さを実感してもらうことを目的に、散水器具実演会や現地研修会を開催しています。特に畑かんマイスター等の農家から、水の使い方や水利用効果を現場で直接説明してもらうのが最も効果的です。

荒瀬ダムからの通水エリアの拡大にあわせて、引き続き、畑かんマイスターと連携した水利用促進活動を実施していく予定です。

今後は、「見える展示ほ」の設置や担い手農家・農業法人等を対象とした「個別訪問」による聞き取りや情報提供、並びに「畑かん利用した輪作体系の実証展示」など、農家の畑かん営農開始に向けた取組を支援する活動に重点をおいて、肝属中部畑かんの水利用向上を目指していきたいと考えています。



散水器具説明会



固定式スプリンクラー



見える展示ほ

話題提供：加工・業務用野菜をめぐる状況

九州農政局生産部園芸特産課 藤川 成明 氏



藤川 氏

我が国では数多くの野菜が栽培されていますが、生産量等が統計で把握されているものは約 100 品目です。野菜の産出額は 2 兆 3,916 億円で我が国の農業総産出額の 3 割程度であり、トマト、いちご、ねぎ等の主要 10 品目で野菜の産出額全体の 6 割程度となっております。

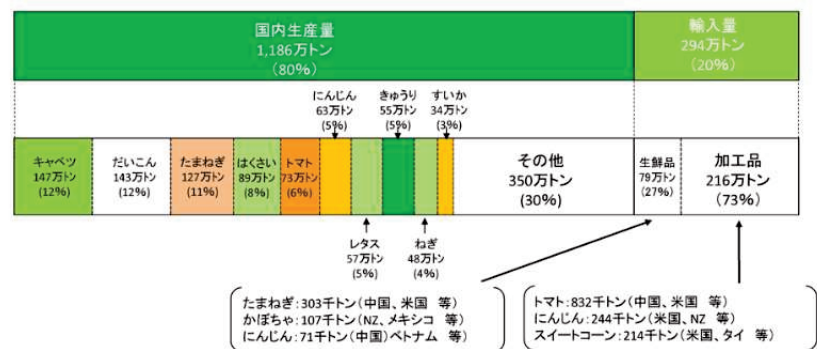
国内生産量の多い品目は、キャベツ、だいこん、たまねぎ、はくさい、トマトなど。輸入量の多い品目は、生鮮品ではたまねぎ、かぼちゃ、にんじん、加工品ではトマト、にんじん、スイートコーンが上位を占めています。

近年、食の外部化や簡便化の傾向が続いており、加工・業務用需要へのシフトが進展すると見込まれています。

食の外部化を背景に、野菜の需要は家計消費から加工・業務用に徐々にシフトし、近年では加工・業務用が全体の約 6 割となっています。

加工・業務用野菜の生産を通じて農家所得の向上を図るためには、低コスト・省力化により規模拡大を可能にする必要があります。また、野菜生産に機械化一貫体系を導入することにより、従来の作業体系と比べて単位面積当たりの労働時間を大幅に削減することが可能となり、近年では、野菜用収穫期の出荷台数が増加しています。

○ 野菜の国内生産量及び輸入量(平成27年)



資料:農林水産省「野菜生産出荷統計」、地域特産野菜生産状況調査、財務省「貿易統計」
注:輸入量のうち加工品については、生鮮に換算している。

加工・業務用野菜をめぐる社会構造等の変化



話題提供：散水器具の紹介

住化農業資材株式会社九州営業所 村上 太一 氏

弊社の灌水チューブは、自然の雨に近い柔らかな散水が可能となっており、土を固めず速やかに浸透し、覆土の消失、泥跳ねを防ぎ、稚苗にも安心です。また、敷設・撤収・収納が簡単となっています。



スミレイン

ヤンマーアグリジャパン株式会社イリゲーション事業部
杉本 真志 氏

弊社の畑かんロールカー（自走式散水機）は、面倒な設置工事が不要であり、移動式スプリンクラーに比べ、30aの設置・回収時間が約40～110分短縮でき、水圧のみで自走灌水・自動停止できます。無人灌水が可能で作業効率アップとなっています。



畑かんロールカー

緑産株式会社プロジェクト営業部 藤井 満 氏

弊社のスマートレイン（リール自走式スプリンクラー）は、平成25年時点でシリーズ累計販売台数約1,700台以上を達成しており、従来の散水方式は一地点に静止させて散水を行いますが、スマートレインは、移動しながら散水を行うため、散水均等性が極めて高く、散水中は無人で自動走行するため省力的な散水が手軽に行える機構となっています。



スマートレイン